素人イチゴ農夫の試練

韓国イチゴ農家　權　昌元
（Kwon, Chang won）

2012年４月、私は勤務先を退職した。それと同時に、林業訓練院に入所し、森林育成のための教育を受け始めた。もはや私も50歳、何か新しい仕事に挑戦するには遅すぎる気もしたが、このまま何もせずにいることはできなかった。妻も私の新しい仕事への挑戦を後押ししてくれた。しかし、３か月程で森林育成の仕事を始めることが難しいことがわかり、別の道を探すこととなった。

私が住んでいるこの地（大韓民国慶尚南道晋州市）は、イチゴの名産地で、農家のほとんどがイチゴを栽培している。しかし、イチゴ栽培は思うほど容易ではないし、多くの収益が得られる仕事という訳でもない。そのため、妻には私たちが農家となり、イチゴを栽培するか否かは慎重に決めようと話していた。しかし、妻は、いつかはイチゴを栽培しようと思っていた私の心を察し、善は急げとばかりにイチゴ栽培のためのハウスを借りる契約をしてしまった。私たちは、イチゴ栽培を始めるしかなかった。

イチゴ栽培には想定以上に多くの、そして様々な問題が起こった。例えば、農薬散布の時期を逃し、苗をたくさん死なせてしまったし、契約したハウスは古く、補修しなければならない箇所が多数あった。それに農業機械もなかった。機械は、周囲の方々に支援していただいた。

やっと苗を育て、ハウス内に苗を定植しようとしたが、天気が邪魔をした。天気は私たちの門出を祝うどころか多くの試練を与えた。その年の秋は台風が３回も到来し、不幸にもハウスが浸水してしまった。そのため、９月５日の定植予定が９月27日になってしまった。

ようやく定植を終えることができたが、時期はすでに夏を大きく過ぎ、朝晩の気温はひどく下がった。浸水のため十分に耕耘されなかった土も、イチゴの生長に良くない環境を生み出していた。そのせいで苗は正常に育たなかった。しかし、晩夏から秋の暮れまで、私と妻は一生懸命イチゴの苗を育て、冬に差し掛かる頃には一輪ずつ白い花が咲き始めた。

時期を逃さず９月初旬に定植した農家は、11月中旬からイチゴを収穫し始めたが、私のイチゴは12月中旬になってから少しずつ収穫ができる程度であった。

ここは智異山（ジリサン）のふもとに位置するせいか、冬は他の地域より寒い。そのため、農民は地下水を利用した水幕施設を使い、ハウス内を保温する。もちろん、電気暖房や油類暖房を使って保温することもあるが、費用を考えて、主に水幕施設を使用する。

一般的に12月になり、外気温が氷点下になると水幕施設を稼働するが、数百の農家がほぼ同時に水幕施設を利用するせいで、地下水

の量が不足する。そのため、農業用水路の水も利用する。私も、私のハウスに必要な地下水の不足から、農業用水路の水を利用する。しかし、この方法だとハウス内の温度を５度に維持することが難しい。そのため、次善の策としてアルコールを使ってハウス内部の温度を維持した。

13年に年が改まってからは平穏な日々を過ごしていた。しかし、ある日大変なことが起こった。旧正月の前日のことである。

日中は、私が共選会でイチゴ輸出のための作業監督をしている関係で、妻がハウス内のイチゴを収穫していた。妻は、いつものように、午後５時頃になると保温のためにハウス内の側窓を閉めて水幕施設が稼働するように時間を設定し、家に戻ってきた。

妻と私は、やはりいつもと同じく夜の10時頃にハウスに向かい、ハウス内の点検をしていた。その時、ある異変に気づいた。ハウスの側窓の片方がしっかり閉められていなかったことから、大量の水がビニールの間にたまっていたのである。

幸いにもビニールは破れなかったが、水の重さでハウスが大きく傾いてしまった。数十トンにも及ぶ大量の水をモーターを使ってくみ上げ、なんとかハウスを元に戻すことができた。時計を見ると、朝の４時を過ぎていた。私たちは、13年の旧正月をハウス内の水のくみ上げをしながら迎えたのである。少しの不注意とはいえ、私と妻は、氷点下の気温の中で大変な経験をすることとなった。

あの寒かった冬の夜の出来事を、そして些細な不注意がイチゴを台無しにすることを、私と妻は決して忘れることはないだろう。この事件の後、私たちはハウスの側窓を再確認する習慣を身につけ、再びこのような事が発生することを防いでいる。

このような事件を経たこともあり、その年の冬が穏便に過ぎることを願っていた。しかし、その矢先にまたもや天気が私たちに試練を与えた。

ここは寒いが雪が多いところではない。しかし、13年２月のある日、途轍もない量の雪が降った。50年ぶりの大雪だったそうだが、私たちはその日、厳しい一日を送ることとなった。

雪が降った日の朝３時頃、村の里長(区長)の切迫した声が放送を通じて流れた。物凄い量の降雪があるから、ハウスの点検を急ぐようにという放送であった。

寝ていた私と妻は飛び起きて、ハウスに急行した。ハウスの上には既に20cm以上の雪が積もっていた。古いハウスの一部が雪の重さで崩壊寸前になっていた。この時、天が恨めしく、イチゴ栽培など始めるのではなかったと後悔の念が募った。しかし、今私たちが真っ先にしなければならないことは、ハウスに積もった雪を落とすことだった。

私と妻は、明け方から昼までハウスから雪を落とし続けた。一部の農家のハウスが崩壊したと聞いたが、幸いにも私のハウスは大きな被害を受けることなく、なんとかこの大雪をやり過ごすことができた。

私は多くの収益を得ることはできなかったが、初年度のイチゴ栽培を無事終えることができた。そして、何よりも困難に見舞われながら、農夫としての足跡を残すことができたことに喜びを感じた。

今日も、私と妻はイチゴを栽培している。ようやく素人農夫から普通の農夫に脱皮したところだが、まだまだ未熟で苦労することが多い。そのような境遇にあっても、妻は仕事を黙々とこなしている。その姿を見ると、私はわけもなくすまないと感じたり、ありがたく感じたりする。苦労している私の妻にこの紙面を借りて感謝の気持ちを伝えたい。ありがとう、そして愛しているよ。

（クォン　チャンウォン）

（翻訳記事。文責：主事研究員 若林剛志）